

保育者養成カリキュラムにおける保育内容の指導法に関する一考察：学生による絵本製作から見た領域「言葉」の指導法への示唆

著者	高橋 さおり, 石田 敏明, 橋本 卓三
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要 = Bulletin of Hokusyo University School of Education and Culture Department
号	6
ページ	85-94
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.24794/00003333

保育者養成カリキュラムにおける 保育内容の指導法に関する一考察

—学生による絵本製作から見た領域「言葉」の指導法への示唆—

A Study on Instruction Method of Childcare Contents in Childcare Worker
Training Curriculum: Suggestions to Instruction Method of Area
“Language” in Terms of Production of Picture Story Book by Students

高橋 さおり

TAKAHASHI Saori

石田 敏 明

ISHIDA Toshiaki

橋本 卓 三

HASHIMOTO Takuzo

I. 課題設定

本稿は、保育士資格および幼稚園教諭2種免許状の取得を目指す学生を対象とした授業において実践した絵本の製作活動を通して、保育内容「言葉」の指導法にかかる課題を明らかにすることを直接の目的とするものである。

教諭の2種免許状は、短期大学士の学位を有することを基礎資格とし、それを相当の免許状とする教職員については、1種免許状の授与を受けるように努めることが求められている。ただし、免許状の2種・1種・専修の区別にかかわらず、指導可能な範囲に違いがないことから、2種免許状の取得課程は教諭に求められる最もプリミティブな資質能力を育成する段階と捉えられる。

幼稚園教諭に求められる最もプリミティブな資質能力とは、幼児に対する保育・教育活動を意図的・計画的・組織的なものとする観点から、適切なねらいを設定し、幼児の発達段階や内外環境を反映した指導上の工夫を常に自覚しながら実践するだけでなく、その成果や課題を分析・評価・改善していく営みを可能にすることであると考えられる。なぜなら、保育・教育活動のねらいを明らかにしなければ、どのような力を幼児に身につけさせるのかがイメージできないまま経験等のみに基づいて保育・教育活動を実践することに陥ってしまう。それでは、保育・教育活動の成果としてあらわれる概ね満足とする幼児の姿の実現に向けた指導上の工夫が施されないままの活動となり、幼稚園教諭による幼児に対する直接的・間接的な働きかけが、当該の幼児にとっての学びにどのような意味を持ち、または、なぜ意味を持たなかったのかという振り返りをおこなうことができず、自らの保育・教育活動を改善していくことができない。中教審等において「学び続ける教師像」の確立が求められている中、保育者（教育者）が教職生活を通じた自らの資質能力を主体的・継続的に高めていくためには、そうした保育・教育活動の自己分析・自己改善に努める姿勢を育むことが、最もプリミティブな資質能力を育成すべき2種免許状取得課程に求められることのひとつとして挙げられる。

筆者らが所属する短期大学部における保育士および幼稚園教諭の養成課程においても、学生が資格・免許の取得後に保育者・教育者として学び続けるためには、保育・教育の実践方法を実践に適用するやり方として習得させるだけでなく、それらを実践するための視点や思考の仕方を身に付けさせることが重要となる。本研究は、こうした保育士および幼稚園教諭を志望する学生に身に付けさせたい資質能力の育成を目指し、どのように保育内容並びにその指導法に関するカリキュラムを編成・実施していくかについて検討するものである。特に、本稿では、現行の「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に示された、育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きつつ、絵本の製作活動の授業実践を題材として、保育内容「言葉」の内容・指導法にかかる課題を明らかにした。

(橋本 卓三、高橋さおり)

Ⅱ. 保育内容の指導法について

社会の複雑化や高度化の急速な進展により、将来を予測することが困難な状況となる中、これからの社会を担う子どもたちに求められる資質・能力を育成する観点から、2017（平成29）年3月告示の小学校並びに中学校学習指導要領が示された。そこでは、学校で育成されるべき資質能力が、①生きて働く「知識・技能」の習得、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養といった三つの柱としてあらわされた。

また、同時期改訂の「幼稚園教育要領」に加えて、「保育所保育指針」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」においても、幼児教育において育みたい資質・能力が、小学校並びに中学校学習指導要領と明確に関連づけられ、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」と整理された。さらに、保育活動の全体を通して資質・能力が育まれるように、保育士や幼稚園教諭らが留意することとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目示されたことは周知のとおりである。その趣旨は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」幼児期の教育が、学校教育の始まりとして位置づけられ、保育士や幼稚園教諭といった保育者の養成課程においても、幼児期の子どもに求められる資質・能力が小学校・中学校・高等学校までを見通して育成される性質をもったものであることを視野に入れつつ指導することが前提となる。

これらの改訂に伴い2019（平成31）年4月より、各教職課程では新しいカリキュラムによる教育がスタートした。新たな幼稚園教諭の教職課程においては「平成30年度実施幼稚園教育要領」に示す5領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の二つの側面から見ていく必要¹⁾があるため、

「領域および保育内容の指導法に関する科目」が創設されている。これは、各領域の理解を前提としながらその指導を具体的に実践していく力を高めていく必要があることを意味するが、幼児に求められる資質・能力を総合的に育んでいくことを想定し、保育計画を立案・実践できる保育者を養成するためには、保育内容の各領域に関する知識・技能を個別・細分化したまま理解させるだけでは不十分と言える。

保育内容「言葉」に注目すると、大橋²⁾は「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をふまえ「環境を通して、生きる力の基礎を培うことのできる人格形成を目指す教育が保育の基本と考えてよいだろう」とし、「保育の基本である生きる力の基礎となる教育は、子どもに『言葉』を通して伝達され、子どもが考えて自ら歩む力へと発達すると考えられるが、子どもの最善の利益のための言葉の指導法でなければならない」と述べる。その上で「言葉での表現は、人の心と心を通わすことができる人間の営みである」が、それを指導するのがいわゆる指導法ではなく「言葉を中心とした子どもの環境を整えることそのものが言葉の指導法だととらえていきたい」とし、3歳児の保育内容「言葉」に関する保育と指導に関して次の事例を挙げている（表1）。

表1 3歳児の保育内容「言葉」に関する保育と指導

<p>保育内容と指導（働きかけ）</p> <p>リズム遊びでは、ケンケンやスキップなどを取り入れて、体を動かして想像性をふくらませながら自由に体を使って表現する。一方で、絵本の展開にリズムと意外性のある『てぶくろ』を読み聞かせた後に影絵や劇遊びへと発展させると楽しめるのもこの時期である。（3歳児は自己主張が強く、自分の世界の中で表現を楽しむ。言葉でも相手に自分の思いを伝えるようになる。自由に好きなように表現遊びをする環境をつくる。そして、保育者から子どもの想いを聞いて言葉を引き出す）</p>
<p>資質・能力との関連と子どもの姿</p> <p>「健康な心と体」「豊かな感性と表現」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」から、のびのびと自己表現することで、自己を発揮していきながら、時間をかけながら折り合いを覚える。</p>

保育内容「言葉」のねらいは、幼稚園教育要領において「(1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」と示される。ただし、大橋が指摘するとおり、それを「指導」する方法を習得することが指導法を学ぶということではなく、育みたい幼児の資質・能力や求められる幼児の姿を実現するためにどのような保育・教育活動をおこなっていくかという点に注目しながら、保育内容「言葉」の内容と指導法を関連づけてとらえ、意図的に計画した保育実践をおこなえるようにすることが必要となる。そこで、筆者らは養成課程において学生たちにこうした力を育むべく、領域「言葉」に注目した絵本製作活動の取り組みを授業実践として次のとおりおこなった。

（石田 敏明、高橋さおり）

Ⅲ. 学生による絵本製作活動

3-1 授業の実践

2020年度前学期、本学短期大学部こども学科・音楽コース2年次学生12名を対象にコースの推奨科目である「こどものうた研究」「こどもの合奏研究」「こどもの音楽研究」の一部として授業実践をおこなった（担当：橋本卓三，石田敏明）。これらは、音楽を中心とした幅広い表現活動の知識と技術を習得し、感性豊かな表現力を身に付ける内容を中心に展開する科目として位置づけており、その一環として、絵本の製作活動を6週にわたって実施したものである。コロナ禍において全て遠隔での実施となったが、オンライン上で指導および学生相互に情報共

有をしながら授業を進めた。具体的には「任意でこどもの歌を1曲選択し、それをテーマにオリジナルで物語を作成し絵本にすること。その際、絵本を用いた保育活動までを想定し「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から目指す姿と、保育内容領域「言葉」で育てたい力を考え、工夫した絵本とすること。さらに、その絵本を用いた保育活動を構想すること。」という指示のもと、絵本製作と保育計画の立案をおこなった。学生が製作した絵本の一部を、写真1、写真2、写真3に示す。

以下、A～Lは学生のおこなった実践を筆者らが抜粋・要約したものである（表2）。①は製作した絵本の題名，選択曲，②は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から選んだ項目の番号³⁾，③は絵本を通して子どもたちに伝えたいこと，④は保育内容領域「言葉」の観点から工夫した点，⑤は製作した絵本を用いて考えた保育計画の具体的な活動，を示す。

（石田 敏明，橋本 卓三）



写真1

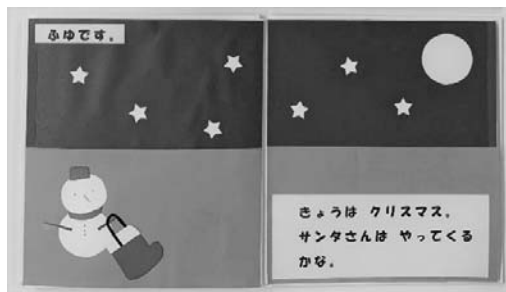


写真2



写真3

表2 学生の製作した絵本について

A	<p>①題名「コムのたからもの」 選択曲「おもいでアルバム」</p> <p>② (3), (7), (10)</p> <p>③多くのことにチャレンジすることで大切なものや人に出会うことができる。失敗を恐れずに進む喜びを知る。</p> <p>④文節ごとに区切り、言葉をわかりやすく配置した。季節が感じられる言葉を選んだ。</p> <p>⑤最近の出来事や思い出の絵を描き、1年間のアルバム作りをおこなう（4歳児）。</p>
B	<p>①題名「なんでもできるよ」 選択曲「ぼよん行進曲」</p> <p>② (2), (3), (5), (9)</p> <p>③苦手なことや勇気のいることにも、自分を信じて挑戦する気持ちを持つ。</p> <p>④始まりの文を問いかけてすることで、話に興味を持てるようにした。「だいじょうぶ」「なんだってできるよ」などの言葉を繰り返すことでテンポ感を作り出した。</p> <p>⑤音楽に合わせた振り付けを考えて発表する（5歳児）。</p>
C	<p>①題名「どんなイロ？」 選択曲「きみイロ」</p> <p>② (6), (9), (10)</p> <p>③何気なくかかっている物や人にそれぞれの「良さ」がある。自分だけが持つ「イロ」を大切に、自分の周りの人たちにも一つだけの「イロ」があることに気付く。</p> <p>④問いかけての文を用いて子どもが考えたことや感じたことを言葉で表現する楽しさを味わえるようにした。オノマトペの響きの美しさや、温かく感じる言葉選びをおこなった。</p> <p>⑤歌に合わせ、3種の楽器（タンバリン、カスタネット、すず）を演奏する（5歳児）。</p>
D	<p>①題名「そうだったらいいのにな」 選択曲「そうだったらいいのにな」</p> <p>② (6), (9), (10)</p> <p>③身近にあるものから様々に想像を膨らませることの楽しさを味わう。夢を実現するために希望をもつ大切さを知る。</p> <p>④登場人物の感情や表情の様子がわかるような言葉選びをおこなった。感性を育むよう、喜びや楽しい思いを伝える言葉に興味・関心を持てるように考えた。</p> <p>⑤自分の思いを描く夢を絵に描く（4歳児）。</p>
E	<p>①題名「はるくんとどうぶつさんのはたけ」 選択曲「小さな庭」</p> <p>② (3), (6), (7), (9)</p> <p>③皆それぞれに得意・不得意があり、それぞれの違いを補い合ったり支え合ったりすることで何かが成し得ることに気付く。気持ちを言葉にして伝えることの大切さを知る。</p> <p>④ナレーションのせりふを最小限にし、登場人物同士の言葉に注目できるようにした。言葉でのやり取りを多くし、気持ちを伝えることの大切さに気づいてもらえるよう工夫した。</p> <p>⑤様々な素材を使用して、自分だけのお花を咲かせる製作をする（5歳児）。</p>
F	<p>①題名「とんぼのめがね」 選択曲「とんぼのめがね」</p> <p>② (3), (7), (9)</p> <p>③自然の美しさを感じる。友だちに素直に謝ることの大切さを知る。</p> <p>④歌詞とリンクさせて、1番から3番を歌いながら楽しめる内容にした。簡単な文章で物語をわかりやすくし、次はどうなるか興味を持たせられるようにした。</p> <p>⑤自分がとんぼだったらどのような景色が見たいか絵を描く（4歳児）。</p>
G	<p>①題名「せんろはつづくよどこまでも」 選択曲「線路は続くよどこまでも」</p> <p>② (5), (7), (9)</p> <p>③身近なものに感情を見出すことで、自然とのふれあいや誰かの役に立つ喜びを知る。</p> <p>④一緒に声に出して楽しめる「ガタンゴトン」という擬音語を何度も使い、電車で親しみを持ってもらえるように工夫した。</p> <p>⑤電車じゃんけんゲームをおこなう（4歳児）。</p>

H	<p>①題名「てのひらをたいうに」 選択曲「てのひらをたいうに」</p> <p>② (7), (9)</p> <p>③苦手な生き物にも自分と同じ命があることを知り、命の大切さに気付く。</p> <p>④文字と絵のページの割り振りを工夫し、文字に興味を持ち、文字から絵を想像できるよう工夫した。すべて平仮名表記として子どもが読みやすくした。</p> <p>⑤外に出かけ、生き物探しをする（5歳児）。</p>
I	<p>①題名「いただきます」 選択曲「なんでも食べる子」</p> <p>② (1), (3), (4), (7)</p> <p>③好き嫌いをなくし元気な体を育てる。苦手な食べ物をどう克服すればよいか、子どもたちが意見交換できるようにする。</p> <p>④会話を中心として、登場人物に感情移入できるようにした。「ポキポキ」「パクパク」などの擬音語を用いたり、「大きくなーれ」「おいしくなーれ」とリズム感を意識して読めるようなせりふを工夫した。</p> <p>⑤絵本を見て、苦手な食べ物を克服する方法を考える（4歳児）。</p>
J	<p>①題名「あおいそらにえをかこう」 選択曲「あおいそらにえをかこう」</p> <p>② (3), (6), (9)</p> <p>③何気なく見ている雲が色々な形に見え、想像したりそれを友達と共有することの楽しさを知る。</p> <p>④子どもに語りかけるような場面をいくつか盛り込んだ。登場人物に親近感を覚え、「楽しそう」「自分もやってみたい」と思えるようなせりふを工夫した。</p> <p>⑤粘土で自分の好きなものを作る（5歳児）。</p>
K	<p>①題名「ぼくはくま」 選択曲「ぼくはくま」</p> <p>② (1), (3), (4), (9), (10)</p> <p>③自分の好きなことや嫌いなことを相手に伝えることができる。</p> <p>④すべて平仮名表記とし、文字を大きくして制作した。言葉を少なくし、大切なことが何か伝わるようにした。</p> <p>⑤音楽にあわせて踊る（3歳児）。</p>
L	<p>①題名「おこりくとなみだちゃん」 選択曲「あしたわらおう」</p> <p>② (2), (4), (10)</p> <p>③自分の苦手なことや出来ないことを諦めるのではなく、勇気を出して挑戦することの大切さを知る。</p> <p>④オノマトペを用いた。なるべく短い文でわかりやすく伝わるよう工夫した。</p> <p>⑤画用紙に自分の笑顔の自画像を描く（4歳児）。</p>

3-2 授業の成果と課題

この取り組みでは、学生が「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」をふまえて曲を選定し、物語の作成と製作した絵本を活用した保育活動までを計画した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から学生が選んだ姿は、「(9)言葉による伝え合い」が12名中9名、これを除くと「(3)協同性」(7名)、「(7)自然との関わり・生命尊重」(6名)、「(10)豊かな感性と表現」(5名)が多かった順となる。この授業では、絵本製作とそれを用いた活動を見通していたことから、必然的に「(9)言葉による伝え合い」を選択した学生が多く、それをふまえた曲の選定がなされていたことがわかる。また、こどもの歌を用いた活動であることから「(10)豊かな感性と表現」に意識が向くことも予想されるが、ここでは「(3)協同性」や「(7)自然との関わり・生命尊重」も多くの学生が選択していたことが注目される。子どもたちに伝えたいこと（保育者の願い）

を明らかにして選曲し製作したことからも、必ずしもそれが「音楽は表現領域」や「絵本は言葉領域」といった領域の区別に基づいたコンテンツというよりは、保育者に求められるコンピテンシーベースの学びをおこなっていることが伺える。

また、製作した絵本を用いた保育計画について、対象となる幼児の年齢を設定していることは、幼児の発達段階が意識された絵本製作や保育計画の立案がおこなわれたことを表している。これは、保育所や幼稚園等の実習を目前に控えた時期における実践であったことも影響していると考えられる。つまり、保育・教育活動に向けた総合的な授業実践をおこなう養成校側の授業実践のタイミングも重要であると言える。ただし、対象年齢を想定した保育計画を立案することが必要であるとはいえ、幼児の発達段階が画一的に捉えられ、その多様性への意識が向けられなくなることは注意しなければならない。「Ⅰ．課題設定」に述べたとおり、学生が将来、保育者・教育者として学び続けるためには、保育・教育の実践方法を実践に適用するやり方として習得させるだけでなく、それらを実践するための視点や思考の仕方を身に付けさせるための、さらなる工夫が必要となる。

このような実践の成果や課題については、幼稚園や保育所等の実習の前と後の変化を比較するなど、今後の分析によって明らかにされなければならない。

(石田 敏明, 橋本 卓三, 高橋さおり)

Ⅳ. 保育内容「言葉」の指導法に関する考察

こうした学生による絵本製作の取り組みは、保育内容「言葉」の指導法にかかる課題として、学生に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確に意識させた上で、それを育成する保育者に求められる資質能力を身につけさせる観点から、どのような内容を選択・配列・組織していく必要があるかということを明らかにしている。別な言い方をすれば、保育内容「言葉」の指導法は、保育者として幼児に提供する内容と切り離して学ばれる（教えられる）ものではなく、「言葉」領域に関する内容を適切な教材として理解し、保育環境に反映していくことができるように配慮されなければならない。そのためには、学生が「実際に何を学んでいるのか（又は学べていないのか）」に注目し、他の保育内容領域での学びを含めた学生の学習経験の総体を踏まえていくことが不可欠であると指摘できる。

たとえば、本稿で取り上げた音楽コースの学生による絵本製作の取り組みを踏まえ、[任意で読み聞かせのための絵本を1冊選択し、それをテーマに幼児が歌ったり演奏したりする歌や曲を設定すること。その際、設定した歌や曲を用いた保育活動までを想定し「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から目指す姿と、他の保育内容領域で育てたい力を考え、それらに相応しい歌や曲とすること。さらに、その歌や曲を用いた保育活動を構想すること。]という指示のもとで、絵本の選択や保育計画の立案をおこなうことなどが有効な手立てとなる可能性が見出される。つまり、学生の保育内容「言葉」への理解が、実際の保育・教育活動で用いられ

る絵本又は歌・曲を媒介として、それらを用いた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育成するための視点や思考の仕方を身につけさせることにつながると期待される。

このような保育者養成カリキュラムを編成・実施していくことの必要性は、社会の大きな変化が訪れるという見通しからも必要である。これからは、人々を取り巻く環境が複雑化し、変化が急速で予測困難な状態になると言われており、学校教育においては「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」⁴⁾が求められている。子どもの言葉の育ちに関しても、子どもを含む人々を取り巻く環境が変化していくことをふまえ、家庭や地域を含めた様々な環境において子どもが学んでいることを念頭におくことが、保育者・教育者に必要な視点となる。それはまた、多文化共生やICTの活用など、今後の具体的な課題にもつながる点である。保育内容「言葉」の領域に関する内容およびその指導法について、こうした背景をふまえた養成カリキュラムの検討がますます重要となる。

(高橋さおり)

V. 保育内容並びにその指導法に関するカリキュラムへの示唆

保育士資格や幼稚園教諭2種免許状を取得するための養成課程は、少子高齢化による生産年齢人口の減少など幼児を取り巻く環境の急激な変化が想定される中、自らのカリキュラム・ポリシーに則したカリキュラムや授業を編成・実施するだけでなく、その成果と改善を継続的・組織的にこなしていかなければならない。そうした意味において、本稿の考察は、保育者にとって最もプリミティブな資質能力を育成する観点から、自らのカリキュラムや授業の改善を射程とする試みと位置づけることができる。

保育所、幼稚園及び認定こども園では、幼児の自発的な活動としての遊びを通した総合的な指導が求められることから、保育者を志望する学生が、保育内容の各領域を個別・細分化して理解するだけでは不十分であると指摘される。このことは、保育内容の各領域に関する知識・技能をどれだけ多く習得したとしても、保育者として意図的・計画的・組織的な保育・教育活動を適切に実践できる資質能力が身に付けられるわけでないことを意味している。したがって、養成課程は、学生に対して、保育内容の各領域について比較しながら、それぞれの領域のねらいと内容・指導法を関連させて理解し、育みたい幼児の姿の実現に向けた指導上の工夫を主体的・協働的に見出していこうとする「学び」の機会を確実に保障することが求められる。

こうした養成課程のカリキュラムや授業の開発にあたっては、ショーマン (Lee S. Shulman) により、教師が授業をおこなう際に複合的に用いる知識基礎 (knowledge base) の一つとして提示された「授業を想定した教育内容に関する知識 (pedagogical content knowledge: PCK)」というとらえ方が参考になる⁵⁾。PCKとは、日々の教育実践に取り組む

専門職としての教師に特有のものであり、教える内容に関する知識（content knowledge）と教える方法に関する知識（pedagogical knowledge）を架橋・往還・融合する「特別な混合物（the special amalgam）」と性格づけられる。また、教師がPCKを理解するための学びの過程が「教育学的推論と行為（pedagogical reasoning and action）」として定式化されている。

このようなPCKについては、周知のとおり、小・中・高等学校の教員養成や教科教育の分野で先行研究が積み重ねられているが⁶⁾、保育所、幼稚園及び認定こども園における保育・教育活動に関しても同様と考えられる。つまり、短期大学部の養成課程では、保育所、幼稚園及び認定こども園ごとに設定される保育目標や育みたい幼児の姿を明確に意識し、その実現に向けた保育・教育活動といった文脈の中で、保育内容の各領域に関する内容や指導法を捉えることができる保育者の輩出が目指される。そのためには、保育内容の各領域に関する授業を担当する大学教員の間で、それぞれの授業実践を相互に振り返り、現状を共有・分析しながらカリキュラムを編成・実施していく体制づくりや組織文化の醸成が必要不可欠な条件となると指摘できる。

（高橋さおり）

注・参考文献

1. 『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか ～モデルカリキュラムに基づく提案～』無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会 編、2017年11月、萌文書林、p11.
2. 『保育内容指導法「言葉」－乳幼児と育む豊かなことばの世界－』大橋喜美子、川北典子編著、2019年12月、建帛社、p1, p8.
3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、以下の10項目が設定されている（「幼稚園教育要領」平成29年告示より）。
(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現
4. 『幼稚園教育要領解説』文部科学省、平成30年3月、フレーベル館、序章 第1節、p2.
5. Shulman, L., Knowledge and Teaching: Foundation of New Reform, Harvard Educational Review, 1987, 57(1), pp.1-22.
PCKは、1985年におこなわれたアメリカ教育研究学会のショーマン会長による講演で提起された。これに対して、PCKの概念が、実践的には教える内容に関する知識（content knowledge）と区別できないなどといった批判がある。しかし、PCK概念が、専門職としての教師（保育者）を養成するプロセスの理解においてきわめて有効であり、構成主義的な思考の概念まで包括するという点で重要であると考えられる。
6. 先行研究として、志村喬「PCK（Pedagogical Content Knowledge）論の教科教育学的考察」『上越教育大学研究紀要』第37巻第1号、2017年、pp.139-148、八田幸恵「リー・

ショーマンにおける教師の知識と学習過程に関する理論の展開」『教育方法学研究』第35巻，2010年，pp.71-81，八田幸恵「リー・ショーマンのPCK 概念に関する一考察―「教育学的推論と活動モデル」に依拠した改革プロジェクトの展開を通して―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第54号，2008年，pp.180-192などを参照のこと。